PROGRAM

ピアノ・ソナタ 第11番 イ長調K. 331 …… モーツァルト

ピアノ・ソナタ 第14番 嬰ハ短調OP. 27－2「月光」 …… ベートーヴェン

ピアノ・ソナタ 第12番 ヘ長調K. 332 …… モーツァルト

ピアノ・ソナタ 第23番 ヘ短調OP. 57「熱情」 …… ベートーヴェン

四季のコンサート 夏

1991年6月17日(月)6:45PM
浜松市民会館ホール
主催：浜松音楽友の会

プロフィール

清水和音（しみず かずね）

4歳よりピアノを始め、1965年より桐朋学園「子供のための音楽教室」に入り、三浦敬子氏に師事。その後、三浦春氏に師事し、1976年に桐朋女子高校音楽科入学。在学中、第17回音楽コンクールで第3位に入賞した後、1980年からはジュネーブ音楽院に留学、ルイ・ヒルトブランド氏に師事。

1981年、パリで開催されたロン・ティボー国際コンクールで第1位なしの4名の賞をあわせて受賞し、内外の大きな話題を呼ぶ。

帰国後、「若い芽のコンサート」でN響と協演、つづいて帰国記念リサイタルを東京で催す。

数々のリサイタル、オーケストラとの共演で活発な演奏活動を行う一方、講師務め、細米ゆず、上村昇らとの二重奏でも好評を得、若手ピアニストの第一人者としての地位を固める。

1983年、第9回日本ショパン協会賞を受賞している。

生の演奏会は、レコードやテレビ・ラジオのような一方通行ではありません。聴き手は演者と共に音楽を作り上げてゆくわけで、場内の雰囲気が演奏会の雰囲気に大変影響します。よい演奏（楽）はよい雰囲気によって作られる、といわれるのもそのためでしょう。

静かに、暖かく演奏家を見守って下さい。

○選曲した時は、一曲（或は一楽章）が終るまでドア（2F左側）の外でお待ち下さい。係員の指示で中へ入って下さい。

○公共の場ですので、お子様の指導は引率の御父兄様が責任をもってして下さい。原則的にとらないよう、又お子様の座席列への着席は御遠慮下さい。

清水和音ピアノリサイタル

ピアノ・ソナタ　第11番　イ長調　K. 331　　モーツァルト（1756 ～ 1791）

この曲は、アンダンテ、メヌエット、アレグレットの3楽章からなる。第1楽章は主題と6つの変奏曲から構成されている。主題は8小節の前半と10小節の後半からなっており、変奏曲では常にこの形が守られている。第2楽章は中間部にトリオをはさんだおおらかなメヌエットであるが、重々しさや暗さを感じさせる箇所もある。異国情緒にあふれた個性的な第3楽章「トルコ行進曲」は、哀愁を帯びた要素と勇壮活発な要素がうまく対比された音楽である。以上のように、このピアノ・ソナタではソナタ形式がどの楽章にも使われておらず、しかも全楽章が同じ調で書かれており、ピアノ・ソナタとしては変則的な作品となっている。なお、この曲の作曲年代については、1778年説と1883年説がある。

ピアノ・ソナタ　第14番　嬰ハ短調　Op. 27－2「月光」　　ベートーヴェン（1770 ～ 1827）

「月光」は、1801年ベートーヴェンが31才の時に書いた作品で、彼の中期の代表的なピアノ・ソナタのひとつである。アダージョ、アレグレット、プレストの3楽章からなる。第1楽章は静かに瞑想にふけるかのような音楽、第2楽章は軽やかな明るい音楽、最後の第3楽章は激しい情熱的な音楽、というように静から動へ、弱から強へ、柔から剛へと変化していく。この作品は、ベートーヴェンの弟子のひとりであったある伯爵令嬢に捧げられている。「月光」という曲名は、ある詩人がこの曲の第1楽章を聴いた時に述べた感想文の中からとられたものである。なおこの曲を書いていたころ、ベートーヴェンの耳の病気は相当にひどくなっていた。翌年の1802年には、自殺を決意し、遺書まで残すほどであった。

ピアノ・ソナタ　第12番　ヘ長調　K. 332　　モーツァルト

第11番のピアノ・ソナタの場合と同様に、この第12番のソナタも1778年にパリで作曲されたといわれていたが、1783年にウィーンで作曲されたという説も出てきている。　アレグロ、アダージョ、アレグロの3楽章からなる。第11番のソナタとは対照的に、全楽章がソナタ形式で書かれている。従って、作品の規模も大きくなり、楽曲構成もがっしりとした音楽になっている。第1楽章は分散和音による流れるような主題から始まる。第2楽章では装飾音がたっぷりと使われ、優雅で陰影に富んだ深さが魅力的である。第3楽章では華麗さや力強さなどが融合され、変化に富んだスケールの大きさが特徴となっている。モーツァルトにしてはかなりの重厚な感じがするところもあるが、全体的には幸福感に満ちた美しい曲で、やはりモーツァルト特有の音楽である。

ピアノ・ソナタ　第23番　ヘ短調　Op. 57「熱情」　　ベートーヴェン

1805年に作曲された「熱情」も、彼の中期のピアノ・ソナタの代表作のひとつである。また、彼の情熱的で闘争的な音楽を代表する曲でもある。この作品以後の彼のピアノ・ソナタは、Op. 106を除いて、まるで情熱が燃え尽きてしまったかのような、静かで内面的な曲ばかりになってしまう。「熱情」を聴くと、誰でもその力強い音楽の響きに圧倒されてしまう。穏やかな安らぎに満ちたすばらしい第2楽章も、第1楽章と第3楽章の激しさを強調するためにあるのではないかと思われてしまうほどである。このような情熱的な音楽がどうして作られたのだろうか。なお、この「熱情」という曲名も、ベートーヴェン自身によってつけられたものではない。1834年にハンブルクのある出版社が、この曲の編曲を出版した時につけたものである。

曲目解説　須貝静直